Edward Hoffman（エドワード・ホフマン）教授講演会
Joy and Altruism in Early Hasidism（初期ハシディズムにおける喜びと利他主義）
2024 年 10 月 18 日（金）14：55－16：40
法文 1 号館 318 教室およびオンライン

イェシヴァ大学（アメリカ合衆国）のエドワード・ホフマン教授に、バアル・シェム・トーヴ（Baal Shem Tov, c. 1700–1760）およびブラツラフのラビ・ナフマン（Rabbi Nachman of Bratslav, 1772–1810）ら、初期ハシディズムにおける喜びと利他主義の思想についての講演をしていただきました。

ホフマン教授は『アドラーの生涯』（金子書房、2005）や『カバラー心理学』（人文書院、2006）などの邦訳書で知られ、カバラー（ユダヤ教神秘主義）についての心理学的な観点からの研究や、正統派ユダヤ教のラビとしての活動を続けてこられました。日本の研究者ともさまざまな交流があり、宗教学研究室でもこれまで何度か講演をなさっています。

講演ではバアル・シェム・トーヴやブラツラフのラビ・ナフマンら、東欧ユダヤ教の民衆宗教運動であるハシディズムの初期の指導者たちの伝承が扱われました。ハシディズムは 16 世紀のイツハク・ルリアのカバラー思想に大きな影響を受けていますが、大衆化する過程でその秘匿性が変容するだけでなく、ルリアのカバラーの主要な概念の解釈についても変化が生じました。たとえば、「ティクーン（修復）」（tiqun）という概念は、ルリアの思想においては独特な世界創造の思想を基盤とする神の臨在（シェヒナー）の救済のための人間の宗教的実践として説明されたのに対し、ラビ・ナフマンの教えでは神が個々の人間に与えた使命をみずからの内面において発見し、その使命を実践することでみずからの人生に喜びを与えることであると語られました。また、初期ハシディズムの思想に影響を受けたエーリッヒ・ノイマン（Erich Neumann, 1905–1960）は、ハシディズムの教えにおける喜びが利他主義の基盤となるという主張を展開しました。

ハシディズムの教えは現代においても、超正統派の共同体において実践されているだけでなく、心理カウンセリングに導入されるなどの新たな広がりを見せています。ゲルショム・ショーレムらによる歴史研究とは異なる、ホフマン教授の心理学的な視点からの考察は、方法論的な観点から見ても示唆的で興味深いものでした。また、ホフマン教授ご自身がユダヤ教徒であり、心理カウンセリングにも従事されていることから、ハシディズムという対象に対する宗教者と研究者の視点の交錯をうかがい知ることができました。

文責：志田雅宏